

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「お年玉なし問題にチャレンジ」

信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授の精神科医師：本田秀夫先生の著書「学校の中の発達障害」～多数派・標準・友達に合わせられない子どもたち～を紹介します。

1 「 」に当てはまる言葉を考えよう（次号で本田先生の考えを紹介します）

(1) 学校とは「	」場所である
(2) 学力とは「	」である
(3) 教育で大事なものは、子どもの「	」を伸ばすことである
(4) 発達障害の子は「	」から、特別支援教育を利用する
(5) 共生社会とは「	」な人たちがお互いにリスペクトする社会

2 子どもの困りごとへの対応

(1) 教室を飛び出してしまう子に、どう対応する？

① 授業が分からない

授業内容を分かりやすく調整したり、読み方や書き方を変えたりすると、子どもが参加しやすくなる。

② 授業内容に興味をもてない

その子の好きな分野や得意なやり方を授業に少し取り入れると、集中できるようになることがある。

③ 衝動性に負けてしまう

掲示物を減らしたり、カーテンを閉めたりすることで、子どもが余計なものに気を取られなくなり、授業に集中しやすくなることもある。

教室を飛び出す「理由」を考え、予防のための「工夫」をします。子どもが失敗してから「対策」をとることはやむを得ない手段です。なるべく予防的な対応を心掛けましょう。

(2) 親や先生が口出ししないと、宿題をやらない子

① 宿題の未提出が2回続いたら対応する

低学年のうち、教師側で難易度や量を調整する。宿題ができない子には、少し簡単な課題を出す。問題を全て解くのが難しい子には「ここまででもOK」というラインを設定する。できる子は先に進んでもよいという仕組みにする。

高学年の場合は、本人の話を聴いて調整する。子どもはまだ見積りが甘いので、決めたことができなかつたら、再調整をする。

② 宿題を気にしすぎない

全員一律の宿題は、一部の子どもにとっては学習につながらない上に、負担の大きいものになる。宿題が「百害あって一利なし」にならないように、子どもに合わせて、宿題の難易度や量を調整する。



とれたて直送便



「いつも見ている人に、心が似てくる」

「早くしなさい!」「やめなさい!」と子どもに言うことはありませんか。子どもは大人の言うことよりも、大人の言動を学んでまねをします。やってほしいことを言葉だけでなく目で確認できるように提示したり、大人がよい手本を見せたりすることが大切です。子どもとうまく付き合うコツは、「あんな先生になりたい!」と思ってもらうことです。